

図書ニュース

大阪府立北野高等学校図書館

第1号 2021.5.21

短くて長いテスト期間が終わった今、続きが読みたく思う本はあるだろうか。—ない？ それはいけない。

これが読まれるのはようやくテストが終わってほっとしているころだろうから、そういうときにはスラスラと読み進められて物語の展開を楽しめるような小説がぴったりくる。今、続きが読みたいと思っている本がないのであれば、本屋大賞系の小説をおすすめしたい。本屋大賞とは、全国の書店員の方々の投票で選ばれる「書店員が今いちばん売りたい本」に贈られる賞で、今年も4/14に大賞受賞が選出されたところだ。

今年の大賞は「**52 ヘルツのクジラたち**」(913/MA)。「52 ヘルツのクジラたち」とは、普通のクジラ（その声の高さは10～39 ヘルツらしい）よりも声がかかなり高いクジラのことであり、ほかのクジラにはその声は聞こえない。声を上げて誰にも受け止めてもらうことができない、世界一孤独なクジラのように声を受け止めてもらうことのできないワケありの女と少年…かなり思わせぶりで、とても今っぽい小説だ。

個人的には、神大理学部卒業後、東大大学院理学系研究科で地球惑星科学を専攻、博士課程修了という異色の経歴を持つ作者による短編集「**八月の銀の雪**」(913/I)が一押しだったのだが大賞には及ばず…表題作「八月の銀の雪」で描かれる地球の内部で降り続ける雪、「瑠璃を拾う」で描かれる珪藻のかけらで作り上げられる造形など幻想的なイメージ豊富な美しい作品だ。

来週からは図書館入ってすぐのガラス棚に過去の本屋大賞受賞本・ノミネート本が特集展示される予定なので、そこから選んで借りてみるのもよいと思う。どれを選んでも間違いがない。やはり毎日本を扱っている書店員さんたちは本をよく知っている。すごいなあ！

そうやって読んでいくうちに「読む」という行為がスラスラ進んでしまうのが物足りなくなってきた、手応えというか、ひっかかりが欲しくなったらもうちょっと違うタイプの小説にあたってみよう。図書館では昔の作品、いわゆる文豪と呼ばれる人たちの作品の貸し出しも多い。そういった作品を紹介しよう。

国語の教科書に載っていて誰でも知っている作品…「山月記」や「こころ」も印象に残るが、1年の頭で読む「羅生門」は皆がよく記憶している作品ではないだろうか。今昔物語集を題材に、衰微した平安京を舞台に繰り広げられる物語は、物語そのものはもちろん丁寧に書き込まれた時代・舞台設定が魅力だ。

…この二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とかいう災いが続いて起こった。そこで洛中のさびれ方はひととおりでではない。旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていたということである。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、

もとより誰も捨てて顧みる者がなかった。するとその荒れ果てたのをよいことにして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいには、引き取り手のない死人を、この門へ持ってきて、捨てていくという習慣さえできた。…

…まるで、当時の荒れ果てた平安京が眼前に見えてくるような文章だ。「羅生門」のように平安朝を舞台とする芥川の作品を「王朝物」といい、「地獄変」「藪の中」あたりが有名だが、「羅生門」とよく似た世界観で私が一番好きだったのが「**偷盗(ちゅうとう)**」(081/I1-7/70-1)だ。「偷盗」も「羅生門」同様、平安朝の栄華が衰え、街中に飢餓や疫病が広がり、盗賊が闊歩するようになってしまった京の都が舞台。加えて夏の灼熱の描写が印象深く、夏に京都に行って鴨川など見ていると、必ず「偷盗」を思い出すほどだ。

盗賊に身を落とした主人公・太郎は、絶世の美女にして盗賊の頭・沙金に惹かれている。沙金の性質の悪さ、むごたらしさを知ってもどうしようもなく惹かれてしまう太郎だったが、何よりも苦しいのは太郎の大事な弟・次郎もまた沙金と深い仲になっていること。どうする太郎！？

「羅生門」と一緒に教科書に載っていることの多い**太宰治「富岳百景」(081/I1-2/88)**は太宰が山梨県御坂峠に滞在したときの体験をもとにした、ほのぼのと明るい感じがよい作品だ。

太宰の、御坂峠から見える富士の威容に反発するような、すねた感じが富士山下の宿屋の母子、茶店の老婆、お見合いした娘さんとお母さん…（挙げながら気づいたけど、女性ばかりだ）彼女たちとの出会いのなかで、ほぐれていくのだが、なんでもないようなそのやりとりがなんだかスツと心地よく心を撫でるような、そんな感じがして、なんとも言えずいい気分が残る。

あまりにいい気分だったので、そこから何冊か太宰の明るそうな作品を手にとった。「**津軽**」(913/D1)はやはり最後が一番すてきだ。春、高台にある小学校で運動会が開かれている。桜であふれかえるその小学校で果たされた再会は、桜の花びらのように淡く透明で美しくて…いつかこんな再会を果たしたいと思った。と言っても太宰のように（三十年以上！）思いを積み重ねて再会する相手は、特に思い当たらないのだけど。

心が洗われるような「津軽」の桜に対して、**坂口安吾「桜の森の満開の下」(081/I1-7/182-2)**の桜は見る人の不安をかきたてる、冷たい美しさのある桜だ。

満開の桜の花は美しい。しかし、同時になんとなく不吉さを感じさせることがないだろうか。満開の桜並木の光景の透き通るような美しさにある、ふとしたバランスが崩れたら全てが暗転してしまいかねないような、そんな繊細さと不安定さ…そんな感性が「桜の森の満開の下」にはある。

桜の森の満開の下は怖ろしい。そう繰り返し語られる「桜の森の満開の下」は遠い昔の話。平気で旅人の物を奪い人を殺す山賊、その妻で山賊に取って来させた人の首で生首遊びに興じる女、そして繰り返し登場する満開の桜の森…その向こうに人間が背負っているのっぴきならない宿命、そのはりつめたきびしさが感じられて鮮烈な印象を残す幻想的な小説である。

—どうだろうか。…ピンと来ない？ それならば実際に本を手にとって見るのが一番だ。梅田の紀伊国屋書店は緊急事態宣言中閉まっているが、私たちには図書館がある。こちらでも緊急事態宣言中につき放課後の開館は15:40までだけれど。